

## 第7回国際日本学コンソーシアム

### —多文化共生社会に向けて—

#### 趣旨説明と総括

古瀬 奈津子\*

今年度の国際日本学コンソーシアムは、「多文化共生社会に向けて」を統一テーマとして行われました。日本は、古代の比較的早い時期から政治的に統一され、蝦夷・隼人やアイヌ・琉球という異文化を含みながらも、現代に至るまで全国的に、比較的均一な文化を保持してきたことは、世界的にみても日本文化・社会の特徴であると言えますでしょう。

しかし、16世紀の世界システム成立以降、特に近年は経済や文化の領域では国境を越えたグローバル化が進行しています。それにともない、海外から日本へやって来る人々も増え、日本の社会や文化は「多文化共生社会」への対応を迫られています。

日本を対象とした研究はともすると日本国内のみに目を向けがちですが、私たちの行ってきた国際日本学は外からの眼差しを日本研究に活かし、世界の中の日本について研究してまいりました。こうした私たちの日本研究に対する姿勢は、現在のグローバル化した世界に適合したものであると思いますが、これからはそれをさらに進めて、日本自身が「多文化共生社会」へと向かっていく中で、国際日本学は「多文化共生社会」をどのように捉えるのか、「多文化共生社会」の中で何をしたらよいのかを考えたいと思いました。

国際日本学コンソーシアムは、部会を設けて専門性を追求するとともに、部会を超えた統一テーマを設定し、学際性をも追求しておりますが、今

年度は、2日間にわたって日本文化部会、日本文学部会、日本語学・日本語教育学部会、全体会を開催して発表・討議を行いました。

日本文化部会では、多文化共生社会において必要となる寛容性について、哲学的な寛容論や信教の自由などが論じられました。日本文化部会、日本文学部会を通じてみると、日本の前近代においては、日本の中の多文化として、日本文化と中国文化が主に取り上げられ、近代においては、日本文化と西欧文化が対象とされ比較される傾向にあったと言えます。現代においては、さらに複雑になり、日本に受容される文化は中国や西欧のものばかりではなくなっています。

日本語学・日本語教育学部会では、SOASの岩崎典子先生が、ヨーロッパにおける日本語教育において近年提唱されている「複文化複言語主義」という概念を紹介されたことが印象的でした。これは日本語学習者だけに限らず、ヨーロッパではEUの統合により、政治経済的には統一される側面が生じましたが、文化的にはそれぞれの文化や言語を尊重し、一人の人間が複数の文化や言語を使用するという考え方が生まれたそうです。

全体会では、森山新先生が岩崎先生の紹介されたヨーロッパにおける「複言語複文化主義」が東アジアにおいても成立するかという視点から論じられました。「多文化共生社会」は、一つの地域における多文化・多言語を社会的レベルで把握した見方ですが、「複文化複言語主義」は、一人の人間が複数の文化や言語を使用する状態を言います。しかし、それはそれぞれ別なことではなく、

\*お茶の水女子大学大学院教授、本センター長

一人の人間が「複文化複言語」を使用することで、「多文化共生社会」の安定が実現するのではないかと考えました。つまり、「複文化複言語主義」は、「多文化共生社会」実現のための手段になるのではないのでしょうか。

その他、全体会においては、日本語学の高崎みどり先生から、「グローバル化」と言いながら、実際には英語統一主義ではないのか、科学には普遍性があるが文化は個別性に価値があるのではないかと、といったご意見も出されました。私たち日本学を専門としている者には身につまされるご意見でした。

しかし、現代において、世界は「グローバル化」されていますが、一方で民族性が強く打ち出され、対立が激化している側面もあります。そのような問題を解決するために、「多文化共生社会」を実現することは重要な現代的課題であると言えます。今回の国際日本学コンソーシアムは、国際日本学の立場から「多文化共生社会」実現のために、その前提となる議論を行ったと位置づけることができると思います。